

## スピノザ、ライプニッツ

2019 年本試

問 3 次の文章は、経験論と合理論をめぐるライプニッツの思想的立場についての説明である。文章中の  ・  に入れる語句の組合せとして正しいものを、下の①～⑥のうちから一つ選べ。

経験論も合理論も、人間の認識能力に信頼をおく点では共通するが、知識のもととなる観念の形成をめぐる考え方が異なる。経験論は、心に生まれつきそなわる観念の存在を否定する。例えば、ロックは、観念は感覚的な経験によって心にもたらされると主張し、その際の心のありさまは  と呼ばれた。

ライプニッツは、合理論の立場からロックに論争を挑み、感覚や経験から観念を形作る知性の働き自体は、人間に生まれつきそなわっていると主張した。この主張を裏づける体系的理論を、ライプニッツは  において展開し、世界を構成する無数の実体と、その全体的調和について論じた。

- |   |   |            |   |               |
|---|---|------------|---|---------------|
| ① | a | 繊細の精神      | b | 『省察』          |
| ② | a | 繊細の精神      | b | 『エチカ』         |
| ③ | a | 繊細の精神      | b | 『モナドロジー(单子論)』 |
| ④ | a | 白紙(タブラ・ラサ) | b | 『省察』          |
| ⑤ | a | 白紙(タブラ・ラサ) | b | 『エチカ』         |
| ⑥ | a | 白紙(タブラ・ラサ) | b | 『モナドロジー(单子論)』 |

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 3	31	⑥	3

問2 次のア～ウは、神をめぐって考察した近代の思想家の説明であるが、それぞれ誰のものか。その組合せとして正しいものを、下の①～⑧のうちから一つ選べ。 

30
----

ア 自然科学の研究は神への信仰と反するものではなく、むしろ、神の意図を知るために行われるものであり、自然法則を明らかにすることは神を称賛することになると考えた。

イ すべての存在は絶対者である神の摂理によって導かれており、誰が救われるかは、あらかじめ定められているため、その決定を人間の努力によって変えることはできないと主張した。

ウ 世界のあらゆる事象は、唯一にして無限の実体としての神のあらわれであり、神の絶対的必然性のもとにあるとして、そのことを「神即自然」という言葉で表現した。

- |   |   |      |   |       |   |        |
|---|---|------|---|-------|---|--------|
| ① | ア | ケプラー | イ | ホッブズ  | ウ | ヴォルテール |
| ② | ア | ケプラー | イ | ホッブズ  | ウ | スピノザ   |
| ③ | ア | ケプラー | イ | カルヴァン | ウ | ヴォルテール |
| ④ | ア | ケプラー | イ | カルヴァン | ウ | スピノザ   |
| ⑤ | ア | コント  | イ | ホッブズ  | ウ | ヴォルテール |
| ⑥ | ア | コント  | イ | ホッブズ  | ウ | スピノザ   |
| ⑦ | ア | コント  | イ | カルヴァン | ウ | ヴォルテール |
| ⑧ | ア | コント  | イ | カルヴァン | ウ | スピノザ   |

問3 実体について考察したライプニッツの説明として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。 

31
----

- ① 実体とは不滅の原子のことであり，世界は原子の機械的な運動によって成り立っていると考えた。
- ② 存在するとは知覚されることであるとして，物体の実体性を否定し，知覚する精神だけが実在すると考えた。
- ③ 世界は分割不可能な無数の精神的実体から成り立っており，それらの間にはあらかじめ調和が成り立っていると考えた。
- ④ 精神と物体の両方を実体とし，精神の本性は思考であり，物体の本性は延長であると考えた。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第4問	問2	30	④	3
第4問	問3	31	③	2

問 4 次の文章は、スピノザが自由について述べたものである。その内容の説明として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

私は、自己の本性<sup>ほんせい</sup>の必然性のみによって存在し行動する事物を自由であると言ひ、これに反して、他の事物から一定の仕方<sup>かた</sup>で存在し行動するように決定される事物を強制されていると言ひます。……被造物についてみてみましょう。被造物はすべて或<sup>ある</sup>る一定の仕方<sup>かた</sup>で存在し行動するように外的諸原因から決定されています。例えば、石は自己を突き動かす外部の原因から一定の運動量を受け取り、外部の原因の衝動がやんでから後も、必然的に運動を継続します。……ここに石について言えることは、(人間を含む)すべての個別的な事物について言えます。……すべての人は自由をもつことを誇りますけれども、この自由は単に、人々が自分の欲求は意識しているが自分をそれへ決定する諸原因は知らない、という点にのみあるのです。

(『往復書簡集』より)

- ① 人間は、他の被造物と異なり、自己の本性の必然性によって行動する。だが、個人的な欲求に囚<sup>とら</sup>われている限り、人間はこの点に気づかない。このような欲求を克服することで、人間は自由となり得る。
- ② 人間は、他の被造物と同じように自己を突き動かす原因を知らないのに、自分は自由だと思い込んでいる。これに対し、真の自由とは、他から決定されるのではなく、自己の本性によって行動することである。
- ③ すべての被造物は、他から一定の仕方<sup>かた</sup>で行動するように必然的に決定されている。私たち人間もまた、他の事物から強制されずには、何ごともなし得ない。人間は自由でないのだから、欲求に従うべきである。
- ④ すべての被造物は、外的な原因によって突き動かされる。その外的な原因についての洞察は、神によって与えられる。そのため、人間が自由になることができるのは、被造物を超えたものの力によってである。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 4	32	②	3

2014 年追試

問 4 西洋近代思想における，キリスト教や神，信仰の捉え方についての説明として**適当でないもの**を，次の①～④のうちから一つ選べ。 32

- ① パスカルは，実存的生き方の最高段階を「宗教的実存」と呼び，偉大さと悲惨さの間を揺れ動く人間の不安定なあり方を直視しつつ，神の愛のもとに生きることの大切さを説いた。
- ② ルターは，教会を通じてこそ信仰が成り立ち，救済がなされるという従来のキリスト教のあり方を批判して，聖書を通じて一人ひとりが直接神と向き合う信仰の重要性を唱えた。
- ③ スピノザは，「神即自然」，すなわち神は無限で永遠の唯一の実体であり，自然そのものであるとして，すべての事物を，神を表現するものとして「永遠の相のもとに」見ることの重要性を主張した。
- ④ ウェーバーは，プロテスタンティズムの禁欲的な職業倫理が資本主義の精神を生み出したと考え，キリスト教信仰と近代産業社会の関係について新たな捉え方を示した。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 4	32	①	3

2011 年本試

問 5 17 世紀後半のオランダで、キリスト教やユダヤ教の正統派の立場から異端とみなされたスピノザの思想の説明として正しいものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 

27
----

- ① 無限実体である神から区別された有限実体は、思惟を属性とする精神と、空間的な広がりである延長を属性とする物体から成り、精神と物体は互いに独立に実在する。
- ② 事物の究極的要素は、非物体的で精神的な実体としてのモナド（単子）であり、神はあらかじめ、無数のモナドの間に調和的秩序が存在するように定めている。
- ③ 神は人間に自己の生き方を自由に選択できる能力を与えたのであり、人間は自由意志によって、動物に墮落することも、神との合一にまで自己を高めることもできる。
- ④ 自然は無限で唯一の実体である神のあらわれであり、人間の最高の喜びは、神によって必然的に定められたものである事物を、永遠の相のもとに認識することにある。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 5	27	④	3

2009 年追試

問 3 人間理性に対する自信は、ガリレイなどによる科学革命以降の様々な成果によって強められていった。また、その自信は、新しい時代や社会に相応<sup>ふさわ</sup>しい諸原理や諸規範を模索する原動力ともなっていた。この時代の代表的な思想家に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。

25

- ① ライプニッツは、宇宙を構成する究極的な要素である物質的な無数のモノイドが、相互に影響し合って、神さえも予期し得ない宇宙の調和をもたらすと主張した。
- ② スピノザは、「永遠の相のもとに」という言葉を用いて、宇宙のあらゆることが神の意志によって神のうちに必然的に生起していることを直観的に認識すべきであると説いた。
- ③ グロティウスは、近代自然法の父とも呼ばれ、すべての人間がもっている理性こそ、<sup>だれ</sup>にでも通用するルール(自然法)の源であるとし、国際平和の重要性を説いた。
- ④ ホッブズは、その社会契約論において、自然権は人間の自己保存の欲求を満たすためのものである以上、自然状態における「万人の万人に対する闘争」を引き起こすと主張した。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 3	25	①	3

2005 年追試

問 9 いま自分が感じている恥ずかしさが何に起因するのかに関連する次の文章を読んで、その趣旨として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。

9

恥じらいは、同情と同じく、本来は徳ではないにもかかわらず、恥じらいで顔を赤らめる人間のなかには、道義的に生きようという欲望が宿っている証拠なのであるから、そのかぎり恥じらいは善である。これはちょうど、苦痛が、傷つけられた身体部分のまだ生きている証拠となっているかぎりは善と見なされるようなものだ。それゆえ、自己のある行為にたいして恥じらいを感じず人間は、実際は悲しみしか感じていないかもしれないが、しかし道義的に生きようという欲望を全然もっていない恥知らずに比すれば、ずっと完全な人間なのである。  
(スピノザ『エチカ』)

- ① 恥ずかしいという気持ちそれ自体は、とりたてて優れたものとは言えない。だが、恥じらっていることは善く生きようとしている証拠とみなせるのだから、その点では是認してもよい。
- ② 恥ずかしいという気持ちは、苦痛と同じで、人間にとって善いものではない。道義を求める人間の欲望こそが善いものであり、それを有することで人間は完全な存在となることができる。
- ③ 恥ずかしいという気持ちそれ自体は、人間にとって徳ではない。ただ、それは悲しみと同様、人間にとって宿命的な感情であり、それを甘受することが人間にとっての道義である。
- ④ 恥ずかしいという気持ちは確かに苦痛である。だが、自己の行為を恥ずかしく感じている人間は道義を遵守しているわけだから、それを感じない者に比べてずっと完全な存在である。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 1 問	問 9	9	①	4